

## 原典史料翻訳

ジョルジョ・ヴァザーリ『美術家列伝』第二版「アカデミア・デル・ディセーニョ会員伝」より  
 ヴィンチェンツォ・デ・ロッシについての記述

友岡真秀

以下はジョルジョ・ヴァザーリ『美術家列伝』第二版に収録された「アカデミア・デル・ディセーニョ会員伝」より、ヴィンチェンツォ・デ・ロッシについて記された箇所を抜粋したものである。16世紀後半、ローマおよびフィレンツェで活動したこの彫刻家をめぐる個別研究は限られており、評価も定まっていないが、バッチョ・バンディネリ死後のフィレンツェ彫刻を考える上でその存在を看過することは出来ない。ヴァザーリによる記述は簡潔でありながら、その主要な業績を積極的に評価しており、デ・ロッシの再評価をうながす一次史料として重要である。邦訳にあたっては、デ・アゴ스티ーニ版『美術家列伝』第二版 (G. Vasari, *Le vite de' più eccellenti pittori, scultori, e architettori*, vol. 8, Novara, 1967, pp. 48-50) を底本とし、あわせて英訳版 (G. Vasari, trans. by G. du C. De Vere, *Lives of the Most Eminent Painters, Sculptors and Architects*, vol. 10, London, 1912-15, pp. 23-24) も適宜参照した。註はすべて訳者によるものである。また邦訳の段落は原典に従い、訳者による補足は〔 〕内に挿入した。

## 〔翻訳〕

フィエーブレ出身の彫刻家ヴィンチェンツォ・デ・ロッシもまた、建築家、そしてフィレンツェのアカデミア会員であり、バッチョ・バンディネリ伝のなかで記したことに加えて、この場で彼についていくらか記憶にとどめておくに足る人物である<sup>1</sup>。ヴィンチェンツォはバンディネリの弟子であり、彼のもとを離れてからは、ローマで大いなる力量を発揮した<sup>2</sup>。パンテオンの内部に制作した、十歳の少年キリストを伴う聖ヨセフの彫像においては、若年でありながらいずれの人物像をも優れた技量と見事なマニエーラをもって仕上げた<sup>3</sup>。次いで彼は、サンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂内に二基の墓碑を手がけた<sup>4</sup>。石棺の上には埋葬された者の肖像彫刻があり、〔礼拝堂の〕ファサードには何体か大理石の中肉浮彫と等身大の〔丸彫りで仕上げた〕預言者像がある (fig. 1)<sup>5</sup>。こうした彫刻をもって、ヴィンチェンツォは卓越した彫刻家の名声を獲得するにいたった。こうして、次



fig. 1 《チエージ家礼拝堂》ローマ、サンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂



fig. 2 《テセウスとヘレネ》大理石、1558-60年、フィレンツェ、ボーポリ庭園

にはローマ市民から教皇パウルス 4 世の彫像が彼に発注され、カンピドリーオ広場に置かれることになった。ヴィンチェンツォはたいへん見事に作り上げたのだが、この彫像は短命に終わってしまった。というのも、この教皇が歿すると、彫像は民衆によって破壊され、地に倒されたからである<sup>6</sup>。この出来事はつまり、人々は前日には天にまで持ち上げていた者たちを、今日になると激しく虐げるということを示している。この像を手がけた後、ヴィンチェンツォは一つの大石の塊から、等身大をわずかに超える大きさの 2 体の群像を制作した。アテナイ王テセウスがヘレネをさらい、顔見知りであるような素振りて彼女を腕に抱きかかえており、その足元に雌豚を配するものである (fig. 2)<sup>7</sup>。この群像以上に繊細に、丹念に、また労をいとわず優美に作品を仕上げることはできないだろう。コジモ・デ・メディチ公爵はローマに赴いて、古代の作品にも劣らず実際に見る価値のある当世の諸作品を視察しに行った際、ヴィンチェンツォがお見せしたこの〔テセウスとヘレネの〕作品をご覧になった。公爵はこれを価値あるものといえそうお褒めになられたので、愛想の良いヴィンチェンツォはこれをうやうやしく公爵に献上し、同時に、彼の作品がなし得ることで公爵にお仕えすることを申し出た。しかし公爵は、すぐにこの群像をフィレンツェのピッティ宮殿に運び込み、ヴィンチェンツォに十分な報酬を支払われたのである<sup>8</sup>。そして公爵はヴィンチェンツォをご自身とともに〔フィレンツェへ〕連れてこさせ、程なくして、大理石を用いて等身大を超える大きさの丸彫りの彫像群でヘラクレスの功業を作るよう命じた。ヴィンチェンツォはこの彫像群の制作に時間を費やしており、これまでに、カクスを殺害するヘラクレス、そしてケンタウロスと闘うヘラクレスを仕上げた (figs. 3, 4)<sup>9</sup>。これらの作品の全体は<sup>10</sup>、主題の点でたいへん秀でており、また骨の折れるものであるばかりか、技能の点でも卓越した作品になるものと期待できる。実際ヴィンチェンツォは優れた天賦の才とすばらしい判断力の持ち主であり、彼の重要な作品のすべてに思慮深さが見られるからである<sup>11</sup>。

ヴィンチェンツォの教えのもと、彼にたいへん称讃されて彫刻に専心した若きフィレンツェ人、イラリオネ・ルスポリについて触れないわけにはいくまい。ルスポリは、ほかのアカデミア会員らとともにミケランジェロの葬儀<sup>12</sup>や前述の結婚祝祭<sup>13</sup>のうちに〔制作の〕機会を得た際、彼らと同様に見識があり、ディセーニョや、彫刻を制作する優れた力量に長けていることを示したのである。



fig. 3 《ヘラクレスとカクス》大理石、1561-67 年、フィレンツェ、ヴェッキオ宮殿



fig. 4 《ヘラクレスとケンタウロス》大理石、1561-67 年、フィレンツェ、ヴェッキオ宮殿

## 註

## 【凡例】

一次史料の所蔵先を示す略記は以下の通りである。ASF=Archivio di Stato di Firenze; BNCF=Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze.

- 1 ヴィンチェンツォ・デ・ロッシ [フィエーゾレ、1525年—フィレンツェ、1587年] は、ローマおよびフィレンツェを拠点として活動した彫刻家、建築家である。フィレンツェにアカデミア・デル・ディセーニョ (素描アカデミー) が正式に発足したのは1563年だが、アカデミアの設立に至る構想は、その前年より彫刻家フラ・ジョヴァンナンジェロ・モントルソリ、サンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂付属修道院前院長ザカリア・ファルドッソ、ジョルジョ・ヴァザーリを中心として進められており、当時フィレンツェで活動していた主要な画家および彫刻家とともにデ・ロッシもこれに関わっていた (G. Vasari, *Le vite de' più eccellenti pittori, scultori e architettori*, vol. 6, Novara, 1967, p. 499)。アカデミアの設立に関しては、森雅彦「アカデミア・デル・ディセーニョの理念と現実——形成期の素描アカデミーをめぐって」『西洋美術研究』No. 2、三元社、1999年、8-25頁を参照。ヴァザーリは1568年に出版された『美術家列伝』第二版で「アカデミア・デル・ディセーニョ会員伝」を新たに収録し、この中にデ・ロッシに関するまとまった記述を残した (本稿での翻訳箇所該当)。これに加えてヴァザーリは、本文で述べている通り、「バッツォ・バンディネリ伝」のなかでも、バンディネリの弟子としてのデ・ロッシの活動についてたびたび言及している (G. Vasari, *op. cit.*, vol. 6, pp. 7-86; pp. 73, 79, 84)。また1584年にフィレンツェで出版されたラファエッロ・ボルギーニの『イル・リポーゾ』においても、デ・ロッシについて一定量の記述がなされている (R. Borghini, *Il riposo, in cui della pittura, e della scultura si favella, de' piu illustri pittori, e scultori, a delle piu famose opere loro si fa mentione, e le cose principali appartenenti a dette arti s'insegnano*, Florence, 1584, pp. 486-89)。ただし両者の記述には、帰属作品や制作の時系列に齟齬が見られる。デ・ロッシに関する個別研究は限られており、最初期のものでは A. Grünwald, *Florentiner Studien*, Prague, 1914 にわずかながら記述されている。研究史において主要な位置をしめるものとしては、1960年代から70年代にかけてハイカンブおよびウッツによって提出された以下の論文が挙げられる。D. Heikamp, “Vincenzo de' Rossi disegnatore”, *Paragone*, No. 169, 1964, pp. 38-42, figs. 49-55; H. Utz, “Vincenzo de' Rossi”, *Paragone*, No. 197, 1966, pp. 29-36, figs. 24-29; H. Utz, “The Labors of Hercules and Other Works by Vincenzo de' Rossi”, *The Art Bulletin*, vol. 53, No. 3, 1971, pp. 344-66。また、R. Schallert, *Studien zu Vincenzo de' Rossi: die frühen und mittleren Werke (1536-1561)*, Hildesheim, 1998 では、ローマでの修業時代からフィレンツェへ帰還するまでに至る前半期の活動が体系的に示された。ほかに R. A. Scorza, “A Life Study by Vincenzo de' Rossi”, *Master Drawings*, vol. 22, No. 3, 1984, pp. 315-317, 375; B. Castro, “Vincenzo de' Rossi: Uno scultore tra Rome e Firenze”, *Scultori del cinquecento*, Rome, 1998, pp. 110-28 も参照。デ・ロッシの生年については1525年とする見解が通例であり、これは1570年12月12日になされた訴訟の記録文書において、証人をつとめたデ・ロッシがこのとき45歳であると記されていることを根拠としている (G. Milanese, *Documenti per la storia dell'arte senese*, vol. 3, Siena, 1856, p. 237)。ただし、H. Utz, *op. cit.*, 1971, p. 344 および D. Heikamp, “Die Laokoongruppe des Vincenzo de' Rossi”, *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, vol. 34, 1990, pp. 343-78; p. 343 では1527年とされる。生年の問題については R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 14, n. 48 を参照。父であるラファエッロ・ディ・バルトロメオ・デ・ロッシ・ダ・フィエーゾレは、1515-16年にロレンツォ・デ・メディチが率いたウルビーノ公国に対する戦争で、フィエーゾレ軍の一部隊の隊長をつとめた人物として1516年に記録されている (BNCF, *Poligrafo Gargani*, schedario manoscritto, 1737; H. Utz, *op. cit.*, 1966, p. 33)。なおデ・ロッシの建築作品については、ボルギーニがその存在を示唆しているものの、具体的な施工例は挙げられていない (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 489)。
- 2 修業時代については、H. Utz, *op. cit.*, 1966, p. 33; R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 27-69 を参照。ウッツは、デ・ロッシが1534年にフィレンツェで税金の支払いを免除されている記録が残されていることから (ASF, *Campione 1534*, Gonfaloniere Nero, c. 478)、このとき早くも9歳にしてバンディネリ工房へ入門していたと推測している。一方シャロットはウッツの見解を踏まえた上で、「バンディネリとともにローマに居た折、バンディネリは教皇レオと教皇クレメンスの両墓碑を手がけていた」とするボルギーニの記述をうけて、遅くとも1536年までには、ローマのバンディネリ工房で弟子として修行を開始したとみている (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 14-15; R. Borghini, *op. cit.*, 1586, pp. 486-87)。同時期およびやや後年のバンディネリ工房に居た同世代の弟子としては、パッティスタ・ロレンツィ [1527-94] とフランチェスコ・カミリアーニ [1530-76] が知られる (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 27)。バンディネリは1536年から1541年にかけてローマのサンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ聖堂内陣に直面して配される《レオ10世墓碑》と《クレメンツ7世墓碑》の制作にあたっており、墓碑に組み込まれた聖パウロ、聖ペテロ、洗礼者ヨハネ、福音書記者ヨハネの各彫像、上段の各三区画を充填する物語場面を表す浮彫 (主題をめぐるとの議論は R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 28, n. 9 を参照) の制作にデ・ロッシも携わったとみられる。ヴァザーリの記述には無いが、ボルギーニは修業時代にデ・ロッシが単独で仕上げた作品として、ローマのサン・サルヴァトール・イン・ラウロ聖堂付属修道院内の大型のレリーフ《ペテロの解放》と《父なる神》を挙げており (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 487)、これは1541年から1542年頃の制作とみられる (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 37-54。この浮彫の制作年代については *ibid.*, p. 56 も参照)。また同様にボルギーニは、現在フィレンツェのヴェッキオ宮殿西側入り口前に設置されている大理石の男女2体のヘルメ柱をデ・ロッシの初期作品とみなしている (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 487)。これらはバンディネリに委嘱されたものとみられるが、彫像の質の低さゆえに弟子の手が入っていると考えられるものの、デ・ロッシに帰属する根拠はない。この2体について

- は R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 54-69 を参照。ボルギーニの記述では、ほかに《レダと白鳥》および《バックス》の存在が知られているが、現在はいずれも所在不明である (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 487; R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 264-67)。
- 3 R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 79-106. 本作品はデ・ロッシのローマ時代における最初の単独作品であり、また一次史料によってローマでの委嘱が裏付けられる唯一の作品である。アントニオ・ダ・サンガットとラファエッロ・ダ・モンテレーポによる仲介で、ヴィルトゥオーゾ・アル・パンテオン会 (ローマの芸術家によって結成された同協会) より委嘱され、1545 年 8 月 12 日にデ・ロッシとの契約が確定した。翌年 9 月 22 日には 65 スクードを受領しており、完成した作品は 1547 年 10 月 9 日以降 11 月 13 日までに、パンテオンの聖ヨセフ礼拝堂に設置された。関連する一次史料については *ibid.*, pp. 232-39 を参照。
- ボルギーニによれば、これに先立つパンテオンの《十歳の少年としてのキリストを伴う聖ヨセフ》と時期を同じくして、デ・ロッシは《受胎告知》を表す浮彫と、等身大を超える大きさの彫像《サトゥルヌス》を手がけた (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 487)。前者の浮彫はヴィテルボのサンタ・マリア・デル・ポッジョ聖堂に配されたことがわかっているが、同聖堂は第二次世界大戦で全壊しており、現在は同聖堂内の聖具室に置かれている (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 106-19)。後者の彫像についてはボルギーニの記述を除いて確認しうる史料を欠いており、作品の所在も不明である (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 267)。
- さらに、これらに続くローマ時代の作品として、《ウベルト・ストロツィ墓碑》のための被埋葬者の胸像が挙げられる。ボルギーニによれば、デ・ロッシはローマおよびフィレンツェで幾多の肖像彫刻を手がけたとされ、同墓碑の胸像はその一つに数えられる (R. Borghini, *op. cit.*, 1584, pp. 488-89)。当該墓碑は被埋葬者であるウベルトが歿した 1553 年より、《パウルス 4 世記念碑》に着手した 1555 年末ないし 1556 年初頭までの期間に制作されたとみられるが、1554 年のフィレンツェ滞在までには仕上げられていたと推察されている (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 257-58)。ウベルトの胸像およびそのほかの肖像彫刻については、R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 119-35 を参照。
- 4 同聖堂内チェージ家礼拝堂には、左壁面に《アンジェロ・チェージ墓碑》、これと対面する右壁面に《フランチェスカ・カルドゥーリ・チェージ墓碑》が安置されている。R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 155-200. 関連する一次史料については *ibid.*, pp. 242-47 を参照。
- 5 チェージ家礼拝堂の制作は、《パウルス 4 世》の彫像制作を挟む前後の時期に行われた。すなわち礼拝堂内部の墓碑は 1554 年から 1555 年にかけて制作され、礼拝堂のファサード外壁の装飾——ニッチに配された《聖ペテロ》および《聖パウロ》の各彫像や、預言者、天使、童児、チェージ家の紋章が表されたスパンドレルの浮彫——は、1558 年から 1560 年にかけて仕上げられた (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 243)。
- 6 R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 146-55. 関連する一次史料については *ibid.*, pp. 239-42; H. Utz, *op. cit.*, 1971, pp. 363-64, Doc. 4 を参照。《パウルス 4 世》の肖像彫刻は 1559 年 6 月 23 日に、ローマのカンピドーリオ広場に面するコンセルヴァトーリ宮殿の二の間 (ピアノ・ノービレ) に置かれた。しかし二ヶ月後の 8 月 18 日に教皇が歿すると同 20 日までに、ヴァザーリの記述にある通り彫像は破壊され、切り落とされた彫像の頭部はテヴェレ河に投げ込まれた。この頭部は 19 世紀末に再発見され、現在に至るまで同地のサンタンジェロ城に保管されている。本来的には等身大をはるかに超える規模の教皇の座像であり、その周囲には 4 体の青年像が配されていたとみられる。青年像に関しては、そのうち 2 体をデ・ロッシが、1 体をジョヴァンニ・パッティスタ・ロレンツィ [1527/28-1594] がそれぞれ手がけたと考えられている (R. Schallert, *op. cit.*, 1998, p. 268)。
- 7 R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 201-23. 関連する一次史料については *ibid.*, pp. 247-49 を参照。本作品の主題は《テセウスとヘレネ》とされるが、フランチェスコ・ボッキは《パリスとヘレネ》として記述を残している (F. Bocchi, *Le bellezze della città di Firenze, dove à pieno di pittura, di scultura, di sacri tempj, di palazzi i più notabili artifizij, & più preziosi si contengono*, Florence, 1591, pp. 70-71)。デ・ロッシはこの群像をコジモ 1 世に献上する目的で、1558 年 5 月から 1560 年 2 月までのあいだに自発的に制作しヴァザーリの伝える通り、完成した同年末にコジモ 1 世がローマを訪れた際、同公爵にこれを献上した。これは、本来的にバンディネリに委嘱されていた巨像《ネプトゥヌス》の制作権をめぐる同時期にフィレンツェの彫刻家によって計画された競作に関して、デ・ロッシもこれに参加を希望する意思をコジモ 1 世に伝えるためであったと考えられる。実際、1560 年 2 月 24 日付のデ・ロッシ (在ローマ) からコジモ 1 世 (在フィレンツェ) に宛てた書簡では、「大理石の巨人像 (ネプトゥヌス)」の制作に携わることを請う内容を記している (J. W. Gaye, *Carteggio inedito d'artisti dei secoli XIV, XV, XVI*, vol. 3, Florence, 1840, p. 24, No. XXVIII)。
- 8 1587 年、フィレンツェのピッティ宮殿の背後に広がるボーボリ庭園内にベルナルド・ブオンタレンティ [1531-1608] が制作したグロッタ (いわゆるグロッタ・グランデ) の内部に配された。D. Heikamp, “la Grotta Grande del Giardino di Boboli”, *Antichità viva*, vol. 4, No. 4, 1965, pp. 27-43; H. Utz, *op. cit.*, 1966, pp. 31-33; D. Heikamp, “The ‘Grotta Grande’ in the Boboli Garden Florence: a drawing in the Cooper Hewitt Museum, New York”, *Connoisseur*, vol. 199, 1978, pp. 38-43; R. Galleni, “Per una ipotesi interpretativa del gruppo scultoreo di Vincenzo de’ Rossi nella Grotta Grande di Boboli”, *BOBOLI 90 (Atti del Convegno Internazionale di studi)*, 2 vols., Florence, 1989, vol. 1, pp. 47-56 も参照。デ・ロッシをコジモ 1 世に推薦する内容の書簡は、註 7 に示した 1560 年の自己推薦書のほか、同年に記された 2 通が現存している——同年 2 月 23 日付、ジュリアーノ・チェザリーノ (在ローマ) からコジモ 1 世 (在フィレンツェ) 宛 (ASF, *Mediceo*, fil. 483A, c. 625) および、同年 3 月 2 日付、ジローラモ・モレリ (在フィレンツェ) からコジモ 1 世 (在地不明) 宛 (ASF, *Mediceo*, fil. 483A, c. 748)。
- 9 H. Utz, *op. cit.*, 1971 を参照。「ヘラクレスの功業」に取材した大理石の連作は 7 体がフィレンツェに現存している。現在、このうち 6 体 (《ヘラクレスとカクス》《ヘラクレスとケンタウロス》《ヘラクレスとアンタイオス》《ヘラクレスとアマゾン王ヒッポリュテ》《ヘラクレスとエリュメントスの猪》《ヘラクレスとディオメデス王》) がヴェッキオ宮殿大広間に置かれ、残る 1 体 (天球を支えるヘラクレス) が同地南端のポッジョ・インペリアーレ (パロンチェッリ家のヴィラとして知られたが 1548 年にサルヴィアーティ家に売却され、1565 年にコジモ 1 世へ引き渡された後、彼の娘イザベラ夫妻の所有となった。現在は寄宿学校として利用されている。) の正門に

配されている。設置の来歴としては、1592年に同大広間で当時のトスカーナ大公フェルディナンド1世〔在位1588-1609〕の嫡子コジモの洗礼式を執り行った際、これら7体のうち《ヘラクレスとカクス》を除く6体が同広間に配された。その後コジモ3世の時代に《天球を支えるヘラクレス》がポッジョ・インペリアーレに移され、これに代えて《ヘラクレスとカクス》が大広間の装飾に加えられた。制作の経緯に関しては、1584年のボルギーニの記述によれば、全12体のうち7体が完成して大聖堂造営局に保管され、残る5体は粗彫りされた状態でピサ近郊のリヴォルノとフィレンツェ近郊のラストラ・ア・シーニャのアルノ河に架かる橋にそれぞれ移設された(R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 488)。軍事総督ジョヴァンニ・パッティスタ・クレシーニの記述によれば、この粗彫りの5体のうち3体は、デ・ロッシ没後の1599年に当時のトスカーナ大公フェルディナンド1世の命でラストラ・ア・シーニャからフィレンツェのジャンボローニャ工房に運び込まれており、これを裏付けるように1600年2月6日付の大公宛の書簡においてジャンボローニャは3体の完成に着手する旨を記している(J. W. Gaye, *op. cit.*, vol. 3, 1840, pp. 523-24, No. CCCXCIX; H. Utz, *op. cit.*, 1971, p. 348; F. Baldinucci and F. Ranalli (eds.), *Notizie dei professori del disegno da Cimabue in qua: per le quali si dimostra come, e per chi le belle arti di pittura, scultura e architettura, lasciata la rozzezza delle maniere greca e gotica, si siano in questi secoli ridotte all'antica loro perfezione (1681)*, vol. 3, 1974-75, p. 497)。しかしながら現在、この3体を含む粗彫りの5体の所在は不明である。現存する7体の制作年代は明らかになっていないが、1563年3月2日付のデ・ロッシ(在フィレンツェ)からコジモ1世(在地不明)宛の書簡では、フィレンツェの大聖堂造営局にある作業場にデ・ロッシによる作品4体を保管している旨が記されており、これらはヘラクレス連作を指すものとみられる(J. W. Gaye, *op. cit.*, vol. 3, pp. 107-08, No. XCIX)。

- 10 ヴァザーリが述べるところの「作品全体」について、ハイカンブは「ヘラクレスの十二功業」を表す彫像群からなる大規模な泉の構想を示す素描(クーバー・ヒューイット美術館所蔵)を提示し、現存するヘラクレスの群像はコジモ1世の委嘱を受けて着手された大規模な泉を構成するために作られたと推察した(D. Heikamp, *op. cit.*, 1964)。当該素描に表されたこの泉は方形の浅い台座の上に八面の欄干で作られる水槽を配し、その内側に一枚の円形水盤からなるカンデラプロ型の噴水が立ち上がる形態を呈しており、下部の八面の水槽の縁、中段のS字持ち送りの上、そして頂頭部に全12体のヘラクレスの群像が予定されたものと推察される。また下部の欄干の八面にはブロンズで物語場面が施されることが示唆されており、ハイカンブはルーヴル美術館所蔵のヘラクレスの冥府降下、「エジプト王の前での廷臣殺害」、「ユピテルへの奉獻」の各場面が一同に描かれた素描を、これに関連するものとして提示している。

- 11 ヴァザーリの記述はヘラクレスの彫像群の制作までに限られているが、ボルギーニの記述にはその後手がけられた作品群が列挙されている。まず、ヘラクレスの群像制作と時期を同じくして、大理石の彫像《メルクリウス》が制作され、ボルギーニによれば本作品はシチリア島パレルモ市へ移送された(R. Borghini, *op. cit.*, 1584, p. 488)。また現在フィレンツェのボーポリ庭園に置かれる大理石の彫像《パッコス》と同地のバルジェッロ国立美術館所蔵の大理石の横臥像《眠るアドニス》はその様式上の親近性が指摘されている(H. Utz, *op. cit.*, 1966, p. 32; R. Schallert, *op. cit.*, 1998, pp. 277-79)。ボルギーニおよびバルディヌッチによれば、《アドニス》はイザベラ・メディチがヴィッラ・パロンチェッリ(現ポッジョ・インペリアーレ: 註9を参照)のために購入したとされるため、イザベラが同ヴィッラを入手した1565年以降に編年されている(H. Utz, *op. cit.*, 1966, p. 32)。なお《パッコス》の帰属については、デ・ロッシとピエリーノ・ダ・ヴィンチとのあいだで見解が分かれている(W. Gramberg, “Eine Bacchusstatue des Cinquecento im Boboligarten in Florenz”, *Festschrift für Walter Friedländer zum 60. Geburtstag am 10. März 1933*, 1933, pp. 191-201; H. Utz, *ibid.*)。

ヴェッキオ宮殿大広間に接続するフランチェスコ1世のストゥディオオーロは1570年から1575年にかけて設えられ、絵画と並んで壁面に施された小ニッチには複数の彫刻家の手になる小型のブロンズ像8体が配された。これらのうちデ・ロッシは《ウルカヌス》を手がけている(E. Allegri and A. Cecchi, *Palazzo Vecchio e i Medici*, Florence, 1980, pp. 323-50; 338-41)。

そのほかフィレンツェ大聖堂のための《聖マタイ》に加え、現在スイスの個人コレクションに入っている《ラオコーン》をも手がけたことが知られる。後者の群像についてはD. Heikamp, *op. cit.*, 1990; G. Capecechi, “Superare l'antico: il Laocoon 'perfetto'”, *Baccio Bandinelli: scultore e maestro (1493-1560)*, Florence, 2014, pp. 129-55; 136-37を参照。

- 12 1564年のミケランジェロの死に際して、フィレンツェのアカデミア・デル・ディセーニョの主導のもとで盛大な葬儀が執り行われた。当該の葬儀に関しては、J. Giunti, *Esequie del divino Michelangelo Buonarroti celebrate in Firenze dall'Accademia de Pittori, Sculturi, & Architettori nella Chiesa di S. Lorenzo il dì 14. Luglio*, Florence, 1564を参照。
- 13 フランチェスコ1世とジョヴァンナ・ダウストリアとの1565年の結婚祝祭を指す。デ・ロッシとルスポリは当該の祝祭に際して、フィレンツェのカント・デイ・カルネセッキに設けられた勝利門の制作を請け負っていた。この勝利門の装飾に関する同時代の記録は以下を参照。D. Mellini, *Descrizione della entrata della serenissima Regina Giovanna d'Austria et dell'apparato, fatto in Firenze nella venuta, e per le felicissime nozze di sua Altezza et dell'illustrissimo, et eccellentissimo S. Don Francesco de Medici, Principe di Fiorenza, e di Siena*, Florence, 1566, p. 131。さらにこのときデ・ロッシが制作した12体の彫像のための支払い記録は以下を参照。H. W. Frey, *Neue Briefe von Giorgio Vasari, Burg bei Magdeburg*, 1940, p. 244, n. 174。また弟子のルスポリの協力については以下の脚注を参照。G. Vasari, *op. cit.*, 1967, vol. 8, p. 50, n. 2。

## 〔図版出典〕

A. Natali, *Rosso Fiorentino: leggiadra maniera e terribilità di cose stravaganti*, Milan, 2006, p. 165 (fig. 1) / 筆者撮影 (figs. 2-4)

